大学留学生の日本語能力と学習カウンセリングの必要性
――国内・海外における日本語教育の実情をふまえて――

平　田　　歩

1．はじめに

日本の大学に在籍する留学生たちが、どの程度の日本語能力を身につけていれば、「授業に一応ついていける」といえるのだろうか。留学生自身も、全く日本語ができないわけではないが、環境の変化になかなか順応できず、日本語能力の不足など自分自身でも問題を感じている。特に日本語に関しては大学で専門的なことを学べるだけの日本語能力が備わっていないということや、日本語教育機関で積み上げてきた日本語が伸び悩んでいることで本人が日本語に自信を持てないでいるという状況がある。その背景には「日本語が正しく修正されないまま身についてしまった」「正確さを求められないまま、ただ通じればいい日本語を使用してきた」などがあるのではないかと考えられる。実際、これまで積み上げてきたことが発揮できず、大学での勉強だけでなく日本での生活や将来にも不安を感じ自信を失うことになる留学生は少なくない。

そこで、本稿では国内外の日本語教育の実情をふまえながら日本の大学に在籍する留学生たちを勉強の面でどのように支えていくことができるか、また、そうする必要性がどの程度あるのかを考察したい。

2．国内外における日本語教育の実情

近年、日本国内外における日本語教育は実に多様化してきた。その現状については主に文部科学省、文化庁によって明らかにされており、ここ数年国内では、「外国人児童生徒・帰国児童生徒に対する日本語指導」「地域による日本語ボランティア活動の支援や推進」海外では「教師不足」「教材不足」「情報不足」などが指摘されている。これらの解決策として、前者は地方自治体や国際交流団体等が、後者は国際交流基金などが中心となり支援していると言われている。以下、国内・海外における日本語教育の実情を簡単に示す。

a．国内

日本国内での日本語教育は主に、①大学院、大学、専門学校に在籍する留学生を対象としたもの　②日本語学校に在籍する就学生を対象としたもの　③小中学校、高校に在籍する児童生徒を

対象としたものに大別される。①②は様々な入管法の緩和政策により門戸を広げてきたが、2004（平成16）年春は近年の外国人犯罪の増加などにより、留学生、就学生の入国のみならず、一部の限られた外国からの外国人に対し入国が極端に制限される事態となった。③は海外に1年以上在留した後に帰国した児童生徒や外国籍で日系移民の2世、3世が伴って来日した児童生徒を指す。日本語を学ぶことを目的として来日しているのは①と②で、その総数は約126,350名となっている。（文化庁調べ。平成14年11月1日現在）③で日本語の指導が必要な児童生徒は約19,000名在籍しているといわれており、該当する児童生徒全体の27%にあたる。（文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況に関する調査（平成14年度）」）

日本語を教える教員は国内の場合、ほとんどがネイティブであるが、上記③を対象とした日本語指導は、必ずしも外国人に日本語を教えることを専門とする「日本語教師」であるとは限らない。また、日本語を学ぶ場も大学、日本語学校、小中学校などの教育機関から地域のボランティアによる日本語教室まで幅広い。

b．海外

2003（平成15）年現在、海外での日本語学習者は235万人と言われている。（2003年7月～2004年3月　国際交流基金調べ）このうち約4割を占めるのが韓国、次いで中国、オーストラリアという順になっており、この3カ国だけで全体の約7割を占めている。日本語が学べる教育機関も全体の約6割が初等中等教育機関、2割が高等教育機関で、この割合は約5年前から変わっていない。

表1　海外の各教育機関における学習者の推移

	順位	1998年		2003年	
		国・地域	学習者数	国・地域	学習者数
初中等教育	1	韓国	731,416	韓国	780,573
	2	オーストラリア	296,170	オーストラリア	369,157
	3	中国	116,682	アメリカ	87,949
高等教育	1	韓国	148,444	中国	205,481
	2	中国	95,658	韓国	83,514
	3	台湾	76,917	台湾	75,242
学校以外	1	韓国	68,244	中国	102,782
	2	台湾	53,038	韓国	30,044
	3	中国	33,523	台湾	16,802

初中等教育機関で日本語教育が行われている場合、それらの国では言語政策の一環として日本語に取り組んでいる場合が多い。表1からも社会、経済の変化が国の言語政策にかかわっている

ということが窺える。高等教育機関では、ほとんどが専攻科目または選択科目として日本語を設けており、中国ではこの5年で学習者が約2倍以上も増加している。海外で初中等教育の段階から日本語の学習者がこれほどにもいるということを日本ではあまり知られていないのではないだろうか。

先に述べた通り、海外における日本語教育では「教師不足」「教材不足」「情報不足」などの問題が指摘されているが、このうち「教材」と「情報」については昨今のインターネットの普及により少しずつ解決されてきているように感じられる。しかし、教師については日本国内と異なり、ネイティブは3割程度しかいない。また、教師1人あたりの平均学習者数が70名を超えており、初中等教育機関においては学習者130名に教師1人というのが現状であるという。

以上、国内・海外での日本・海外での実情を述べたが、日本語教育の多様化は進む一方で、その対策はまだ一部の地域に偏っているようである。

3．大学留学生の日本語能力の実情

本来、日本の大学に留学する留学生は入学前の予備教育（日本や海外にある日本語学校）で日本語を習っておいて来るべきである。しかし、実際は大学で不自由を感じることのないレベルまで日本語が積み上げられていないというのが現状であると言えよう。大学生として大学で学ぶ留学生に、授業に参加しうるだけの日本語能力をどうつければよいのだろうか。

生活面では国内から進学し大学に入る留学生たちには、1～2年間の日本での生活経験があるが、海外から初来日で日本の大学に留学する学生たちにはこの経験がない。また、どちらの場合も日本の大学に在籍する留学生の多くは私費留学生であり、しかも全面的に母国からの送金に頼ることなく、アルバイトなどで自活していることが多い。入学したての留学生は大学という新しい環境、異国での慣れない生活、日本語能力の不足など様々な不安に1人で向き合うことになる。経済的にも不安定になりやすく勉強にも影響を及ぼしたり、対人面では日本語でうまくコミュニケーションがとれないことで、日本人との付き合いがうまくできないと感じてしまいやすくなるのではないだろうか。やはり、入学或いは入国前にしっかりとした勉強や経済面での見通しを立てておくことと、ある程度の日本語を習得しておくことが肝要であると思われる。実際、留学生の多くは、大学に入ればすぐに奨学金がもらえ、アルバイトだけで自活でき、日本で生活するのだから日本語もすぐにできるようになるだろうと、いいことだけを考えている場合も少なくないのである。これは留学生教育の問題の一つにすぎないが受け入れ側と留学生との思惑のギャップをどう埋めるかというのは大きな課題であろう。

さて、大学に入学した留学生たちの日本語能力について述べる際、「一応、大丈夫」または「授業には一応ついていける」など聞くことがある。これで十分と言えるレベルではないが、この程度なら授業に参加でき得るということであろうか。何を基準に測ったレベルなのかは明確で

はないが、留学生と実際に接している者であればこの状況がどの程度の日本語能力を指し示しているかはわかる。留学生自身も自分の日本語能力についてどのように感じているのだろうか。現状を把握するべく入学後3ヶ月たった留学生に以下の要領でインタビューを試みた。

1．対象者：山口県A大学　同大学短期大学部
　　2004（H16）年　4月に入学した留学生　　14名
2．調査期間と方法：2004年7月　　インタビューによる個別調査
3．質問項目：①大学の生活には慣れましたか。
　　②日本語はどうですか。
　　③日本語で困ることはありませんか。
　　④大学の授業はどうですか。

4．インタビューの結果

まず、①については全ての留学生が「慣れた」と答えた。このような質問をした場合、ほとんどの留学生はこう答える。しかし実際はまだまだ日々の学生生活でも知らないことやわからないこともあり、日本の生活ペースについていくことだけで精一杯という学生もいる。例えば大学の掲示板を見て、連絡事項などを確認するよう促しても「見ない」「見てもわからない」ことがあると答えた学生が4名いた。これらの理由は、自分には関係ないだろうと思ったり、見なくても誰かが教えてくれるだろうと思っているとのことであった。「見てもわからない」というのは掲示板に書いている内容が自分に関係があることなのか理解できないということであるが、このような場合、留学生同士教えあったり、情報交換はほとんどしていないということである。

②と③は日本語能力についての問いである。これに対して「日本語は十分わかる」と答えた学生は2名であった。残りの学生は「大体わかる」という回答であったが、これが④の授業のこととあわせて考えると「半分くらいわかる」という回答に変わってしまった。一口に日本語能力といっても「話す」「聞く」「読む」「書く」の四技能を総合的にバランスよく習得しているとは言い難く、特に不得意な技能力を求められ困ることもあり、日本語能力不足を感じるという学生もいた。さらに日本の大学に入るなら、とにかく日本語を完璧にマスターしておく必要があるとの意見もあった。

このように留学生がそれぞれに日本語についての問題をかかえていることが明らかになってきたが日本での生活や大学での授業において日本語が理解できない理由を学生に尋ねると、一様に「自分の日本語能力が足りないから」という答えが返ってきた。自分の日本語能力について悩みや問題を相談しにくる学生には苦手分野を補い、強化する勉強方法の助言ができる。しかし、悩みを打ち明けてこない学生のほうに、日本語能力において問題を抱え込んでいる傾向があるよう

に感じられる。大学に入学した留学生それぞれが、勉強面、生活面で自立でき、日本での留学生活を意義あるものにするにはどのようなサポートが必要なのだろうか。

5．学習カウンセリングの必要性

大学入学前に日本国内、或いは海外の予備教育機関でどのように日本語を学んでいたのか、留学生の学習暦は様々である。また日本語能力における問題点も違うため、単に一括りにして留学生の日本語能力がどうだということもできない。日本に来日間もない留学生は生活面など、毎日の生活に慣れようと努力することだけで精一杯で勉強に集中できないという状況も出てくる。このような留学生には日本語だけを教えていても問題解決にはならない。留学生に日常的に接する者が生活面を支援しつつ、日本語教育を担当者は日本語能力のどの部分を補えばよいのかを見極め、適切な指導をすることが必要であろう。個々の留学生に対して勉強のつまずきや悩み、諸問題についてともに考え、学習への意欲、関心を引き出し、取り組むべき課題を留学生自身に明確にさせることから自己学習への援助を図るというような学習カウンセリングの必要性を感じる。さらに、日本語予備教育機関と連携を図り、予備教育の段階から大学での勉強へと、いかにつなげていくのかを考えることも大きな課題である。

＊表１は　国際交流基金　『海外の日本語教育の現状――日本語教育機関調査・1998年（概要版）』(1999) と　日本語教育学会『留学生受け入れと大学における日本語教育を考える』(2001) の資料を抜粋し表にした。

《参考文献・資料》

・国際交流基金　『海外の日本語教育の現状――日本語教育機関調査・1998年（概要版）』(1999)
・国際交流基金　『2003年海外日本語教育機関調査（結果概要）』(2004) http://www.jpf.go.jp
・日本語教育学会『留学生受け入れと大学における日本語教育を考える』(2001)
・山下直子「外国人留学生の講義理解　――理解に影響を与える要因とストラテジーに関する意識調査から――」『日本語教育　107号』(2000)